

「8月9日」

2009/08/09

にもかかわらず今日も今日とて太子は青ジャージで、コイン季節感ゼロだなど内心で毒づいた。

「おはよーサンバ！」

「びっくりするほどさむい挨拶ですね。でも空調が効いているんで間に合っています、あとドア早く閉めてください」

「ちよつとお前も先輩に挨拶しろよ、コラ！」

「うわつべたべたな顔押し付けしないでくださいああもう暑苦しい！」

「ぎゃー」

「倒れる前に、ドアを閉める！」

「お前……人のこと殴っておいて……」

「太子が悪いんでしょう？ せつかく涼しくしてるんですから、無駄にしないでくださいよ」

「わかったよ……くつそー芋の癖にー」

「ところでこんな時間に来るなんて珍しいですね、もしかして夕方は豪雨ですか？」

「毎度毎度失礼だなお前年下の癖して」

「恐縮です」

「いや誉めてないからな」

「わかってますよ」

「じゃん、と太子が自慢げに机の上に取り出したのはごくごく普通な鉢植えだった。

そこに咲く花を見て僕はああ、夏ですからね、と呟いた。

朝の院生室には僕と太子しかいなかった。

いつもなら僕一人の時間帯だった。この研究室の始業まではまだまだ時間があるし、他の先輩方はいつも遅刻ぎりぎりですぐに現れる。

太子だっけいつもならあと一時間は来ないはずだ。それが今日はどういった風の吹き回しなのか、ばあんと音でもしそうなくらい豪快にドアを開け放って現れやがったのだ。

今は、夏で。今日も暑くて。朝なのに駅からここまでほんの十数分の間でわりかし汗をかきすぎた。

それからこんな、下らないやり取りが繰り返されたりしてたりする。

ようやくひと段落着いた僕は、コンビニで買って来た。ペットボトルのスポーツドリンクのを飲んだ。買ったばかりだからまだ冷たくて気持ちがいい。でもなんか朝からどつと疲れがして思わずため息が出る。

太子はがさがさと音をさせて机に向かった。音の元は手にした白いビニール袋でそこそこ重たそうに見える。

それが何なのかちよつと興味があつて、僕は太子の側に行った。

太子はちよつと不思議そうな顔して僕に振り返り、視線が手元に向いていたことに気付いたのか、ああこれ、と一言呟いて何かを取り出した。

じゃん、と自慢げに机に乗せたのは、レンガ色のごく普通の鉢植えだった。

そこに咲く花を見て、ああ、と声が出た。

「夏ですからね」

「だろう？」

僕でもわかる、それはひまわりの花だった。

ただし小学校とかで育てたような背の高いやつじゃなくて、室内で楽しめるような小ぶりの種類。

小さい分迫力はないけれど、いくつかまとまって咲いてい

る様子はかわいらしくて十分きれいだ。

でも急にどうしたんですか、聞くと、実はなあともったいぶつたように太子が話し始めた。

「一昨日の占いの結果が良かったんだよ。なんか気分良くてさ。それにラッキーアイテムはひまわりだっていうから昨日買って来たんだよ」

「……………おととい？ 今日じゃなくて？」

「そう、一昨日。星占い一番だぞ！」

「それともう時効なんじゃないですか？ 今日はどうだったんですか」

「さあ、知らん。昨日も今日も見えないし」

「……………はあ」

話の通じなさにほんのり頭が痛くなりそうだった。占いつて、有効期限は当日限りなんじゃないの。

「そりやお前、新しい占い見るまではずつと有効だろう！」

「……………まあ、占いなんて本人がどう信じるかですもんね」

本人がそう信じるならそれでいいのかもしれない。何だか投げやりな気持ちで僕は自分の席に帰ることにした。

ひまわりに癒されたものの、やつぱり疲れた気がしてならない。

何だろう、僕この人と相性悪いのかな。

それこそ今度、相性占いでもチェックしようと思つたけど、それで悪い結果が出たら立ち直れなくなりそうなので絶対止めておくと固く決意する。

しかも何でわざわざ僕が調べなきゃならないのかよくわからないし。

イスに座ってまたペットボトルの中身を喉に流し込んだ。冷たい甘みが喉を滑り落ちていく。

ふう、と口を離して、見ると太子とぼつちり視線が合ってしまった。

さつきからずっと、太子がひまわりの鉢植えを持ったままこつちを見ていたのには気付いていた。

見てくる、というよりはひまわりを向けてくるといったほうが正しい。

両手で持った鉢植えを動かして、ずっと僕の動きを追うようにひまわりの向きを変えてくる。

その意図がわからなくて僕は少し目を細めて太子を睨んだ。

「……………さつきつからんですか」

「ひまわりってさ、太陽を追いかける花じゃない」

「知ってますよそれくらい。そうじゃなくて、なんでずっと僕の方を見るんですか」

「太陽だろ？」

「はあ？」

本当に、話を通じない人だ。もうちよつと言葉を選んでくれたらいいのに、頭悪いのだろうかこの人は。

そう文句を言おうと思つたのに、それは次の太子の一言に見事に封じられてしまった。

「妹子は私にとつて太陽だからな」

さらりと言い放つ、そんな馬鹿馬鹿しくも底抜けに明るい一言で。

リアクションをとり損ねて、取り繕う表情もわからなくなつた。

言葉の深読みを始めそんな思考を停止させて、とりあえずつかつかと太子の元に寄つて鉢植えを奪つた。

本当はこのわけのわからないもやもやした動揺に任せてこの鉢植えを叩き割つてやろうと思つたけど、太子の驚いた顔に少し冷静になり、花に罪はないと思ひ直してあきらめた。

代わりにこの部屋で一番日当たりのいい窓際に進路を変えて、そこに鉢植えを置いてやる。

「ひまわりは、お日様が当たるところに置いてあげるんです

よ」

ひまわりを咲かせるのは太陽だ。
僕なんかじゃない。

だよな、と太子は驚く顔を変えて、よし水をやらなきやなと立ち上がって部屋を飛び出していった。
道具を探しに行ったのか。でもどこに。

疑問には思ってたけれど放っておくことにする。運良く何か見つければ帰って来るだろうし、見つからなくてもいつかは帰って来るだろう。

そもそも僕は太子の保護者でもなんでもない、ただの研究室の後輩、だ。

僕は小ぶりのひまわりの中心、濃い茶色の部分をつついて花を揺らした。

でもあの人はどうして、どういうつもりであんなことを言っただろう。

頭が往生際悪くぐだぐだと考えはじめるから強く眉間をもんだ。

きつと何も考えてないに違いない、と決め付けて、相変わらず話のわからない人だなとうんざりした。

始業の時間まであと三十分を切っていた。

そろそろみんなが来始める時間帯、僕は今日やるべきことはなんだったかなと、昨日のメモを探し始めた。

「9月9日」

2009/09/09

ぴた、と痛いぐらいの冷たさが頬に押し当てられて、気付いたら何者かに裏拳をたたき込んでいた。

「……………せめて誰か確かめてからに……………」
「……………なんていうか反射で」

でもまあ、いいじゃないですか、わかってました、思った通りでした、いやあ、太子で良かったなあ。

なんて、我ながら白々しいとは思いつつ朗らかな口調で言つて笑いかけてみた。イスを回してわざわざ振り返つてだ。肝心のその襲撃者は床に倒れ伏していた。

「いただ……………ちよ、えー鼻血出てるもしかしてこれ？」
「あの、何か変なことでも考えてたんですか？ ………………なんでまたこんな時に」

「なわけあるかい！」

思いつき顔をしかめてしまったら、怒鳴られた。勢いよく立ち上がって、何だ元氣じゃないか。

と、思ったら鼻を押さえた手の隙間からあつという間に赤いものが溢れ出て、ばたばたと太子の足を汚した。

あんまりにきれいに流れるものなのでついついぼかんと見入ってしまった。

「情熱は鼻から迸る……………」

「何意味のわかんないこと言ってるんだよ！ 大惨事だろ！？ テイツシュ、ティツシュ！！」

それから太子は自分の足元を見て、出血量の多さを今さら自覚したのかふらふらとその場にへたり込んだ。

その様子によくやく僕も慌てて、となりの机から箱ごとテイツシュをかっさらい太子のそばに急ぐ。

とりあえず適当に2、3枚を引き出して、太子の手に押し付けた。

「……………あー、何これ、うわー、すごい出る。私なんかしたか？」

「いやあ……………すみません」

そんなに力入れたっけなと首をひねりつつも、現状として

確かにこの大惨事である。さすがに僕も申し訳なくなつて、もう2、3枚ティッシュを取る。

鼻から太子の手を引き剥がして、新しいティッシュで押さえつけた。

「これ、そっちの手で持ってください」

言われるままに太子が逆の手でティッシュを押さえる。

今まで鼻を押さえていた、血だらけの手を僕は新しいティッシュで拭き取った。

でも一部もう既に血が固まっていて、どうしても落ちない。

「いや、いいよもう。後で洗いに行くからさ」

「でも」

太子は僕の手を払って、自由になった両手で新しいティッシュを取って手際良く鼻につめていた。

「しかし……………大惨事だな、これ」

「……………なんか嫌な感じですね」

二人で床を見つめてため息をつく。

「なんていうか……………本当にすみませんでした」

「いや……………うん、私も悪かったよ」

あ、と太子が不意に大声を出した。何事かと驚いていると太子が慌てて何かを拾い上げた。

「そうだよ、アイス買ってきたんだよ！」

うわー、溶けてる、という情けない声が聞こえてきた。ひよいと太子の持っているものを覗き込むと、コンビニの白い袋にふたつ、見慣れた青いパッケージが入っていた。

「うーん。まだ食べれるかな……………冷凍庫入れとけばまた固まるかな……………」

「……………もしかしてそれ、僕の方ですか？」

「そうだけど」

事の発端、僕の頬に押し当てられた何か痛くて冷たいもの、の正体がようやくわかった。

どうやら困っているらしい太子が持った袋の中、僕は青いパッケージを手に取った。

「あ……………」

「いただいてもいいんですよね？」

これくらい大丈夫ですよ、食べてしまいましょと。言うと、太子がしばらくぼんやりと僕を見ていて、それか

ら遅れてうれしげに頷いた。

「しかしな、お前、筋肉お化けなんだからそんなこともっと自覚しろよ」

「そんなんでもなくないですか？ 普通ですよこれくらい。むしろあんたが貧弱なだけですよ」

「私のほうが普通！ お前がお化けなの！」

「はいはい。これに懲りたらもう、研究室でエロい妄想しないでください」

「違うよ！」

一応床をティッシュでこすってみたけれど、やはり一部固まってしまうてなかなか落ちない。

濡れ雑巾を調達してきてからまた掃除することにして、今はとにかく溶けかけのアイスだ。

気を抜くとすぐに手に垂れてくるから二人で慌ててぎくぎく食べた。

僕は太子の鼻に詰まったティッシュを笑って、太子がそれを吹き飛ばす勢いで怒る。

クーラーのきいた部屋だったけど、こうやって食べるアイスはおいしかった。

「10月3日」

2009/10/03

少しだけ緊張しつつひねってみたドアノブに手こたえはな
くて、やっぱり開くことはなかった。

ほらな、という思いを込めて後ろを振り返ったら、太子が
両手にヘアピンを構えていた。

「ふっふっふっ、まーかせんしゃーい」

「えー、あんたそんな器用なことできるんですか？」

「まあ見てろって」

横に退いて扉の前を譲ると、太子はうきうきとした様子で
しゃがんで鍵穴に真っ直ぐに伸ばしたヘアピンを突っ込んで
いじくり始めた。

僕はというとそんな太子にはあまり期待せずに、ポケット
からケータイを引っ張り出して画面を確認した。もう5分程
度で18時だった。メールはまだ来ていない。松尾先生は書

置きに気付いただろうか。それともまだ事務にいるのだろうか。書類の受付がまた河合さんだったらその可能性は極めて高いと思っただけで、その場で不備の修正をさせられているのだ。心の中で応援しておいた。松尾先生に誤字が多いのは周知の事実だから仕方がない。特に事務の河合さんはそういった書類の不備に厳しいから、つかまってしまえば当分帰ってはこられないだろう。

それでも今日、みんなでお団子を食べようと言って、お使いを頼んできたのは先生だったからその先生が帰ってこないことにはどうしようもない。

研究室の冷蔵庫には皿の上にきれいに積まれた団子がきちんとラップを被って保管されている。

じゃあなんで僕が今こんなところにいるのかと言えば、先生を待ちきれなくなつた太子が月を見たいと騒ぎ始めて、それが心底うざかったからに他ならない。

そうでなければわざわざ開放されてもいない屋上に来ようとなんかしない。少なくとも僕は。

太子はまだごそごそと鍵穴と格闘をしている。僕は一応鬼男先輩にもメールを送っておいた。太子と散歩してるので松尾先生が帰ってきたら連絡が欲しいという内容だ。でも先輩だって先生を待っている途中でどこかに出かけていつてしまったので、正直僕らと先輩と先生、誰が先に研究室に帰るのかは微妙なラインだと思っ

やることも済んで手持ち無沙汰に意味もなくケータイをばたばたさせていたら、不意に太子が両手を挙げて立ち上がっ

た。

「やった！ 勝った！！」

「ええーっ」

信じがたかったものの、胸を張る太子にイラつきつつノブを回したら今度は呆気なく開いてしまった。

この学校のセキリュティはダメだと思った。

「おお、月だ月！ なんだ、結局晴れたなあ」

「雲は多いですけどね」

「私、月だけよりも雲があったほうが好きだよ。雲の下の方だけ光って見えるじゃん。あれ、きれいだよな。ウサギいなかー」

「僕の視力では確認できませんね」

「むむ、あの影が怪しい……………おい！」

「奇声あげて手なんか振らないでくださいよ……………」

太子が騒がしく屋上の真ん中まで走っていく。

鍵が掛かっていたということは、この学校の屋上は立ち入り禁止なのだ。悪いことをしている自覚はあって、だから少し静かにしてほしかった。

僕の心配をよそに太子は空を見上げて、ぶんぶん腕を振っている。

「おおい……………」

そうして太子は、空を見上げてのけぞりすぎて、最後には足を滑らせて仰向けにひっくり返った。

そんな予感もしていたけど、正直太子の背中に手を差し出している自分に気付いた瞬間は驚いた。

それでもとっさに支えきれなくて、クッションになるように太子とコンクリートとの間に自分の体を割り込ませる。

二人そろって屋上に転がった。

限界まで開け放っていたドアが支えをなくして、ゆっくりと閉まる音がした。

「妹子、ナイスキャッチ」

「バカかあんたは！」

太子の体は軽い。きちんと食べているのかと疑問に思う。だから痛みとかはなくて、重くもなくて、体温だってジャージのかたい生地越しでは伝わってこない。

二人して屋上に寝転がってしばらく、じっと空を見上げていた。

「きれいだね、月」

「ええ」

「でも雨月って言ってさ、雨でも月見を楽しむ方法があるんだよ」

「そうなんですか？」

「うん。見えないものの方がきれいなんでって、そういう理屈。雨で月が見えなくてもお団子食べて、お月様を思い浮かべるの。そりやそうだよな、想像の中のきれいさに、目に見えるものじゃ敵わないよ」

「でも、月、きれいですよ。僕じゃ多分、これ以上の月は想像できません」

「妹子はまだまだお子様だなあ」

「あんたには言われたくない」

「どういう意味だよ、それ！」

「そのままですよ」

空の高いところでは風が強いのもかもしれない。

雲の位置が変わって、光の加減が変わった。月が欠けて闇が深くなる。

不意に太子が起き上がって仰向けの僕のとなりに座り込み、見下ろしてくる。

影になっているはずなのに目だけが不思議と光ったように見える。

でももしかしたらそれは、ただの僕の想像かもしれない。

「目に見えないものの方がきれいなんだ」

夜に、話するのは好きではない。

昼間には思いもしないことばかり言いたくなるからだ。

それは明るい日の下で思い返すと恥ずかしくなる。

恥ずかしいことはできる限り少なくして生きていきたいと思う。

「目に見えないと信じられません」

なるほど、子供の意見かもしれないとは思ったけれども、本心だった。

太子は目を細めて猫みたいに笑う。

「お前はそうかもな」

ポケットの中でケータイが震えだした。

少しだけ腰を浮かせてケータイをとる。

メールではなくて着信で、相手は鬼男先輩だった。

「もしもし」

「あ、僕だけ。今どこにいる？」

ケータイで僕、と名乗るのがおかしかったけれども、かうじて笑うのは我慢した。

「今屋上です。バカと一緒にです」

「え？ 研究棟の？ 立ち入り禁止じゃなかったか？」

「あのバカがヘアピンとかで鍵開けちゃいました」

「え、あの人そんなことできたの？　ってどうかそれまじいんじゃないか？　……………え？　あー、はいはい、小野と厩戸がいつしよにいるみたいですよ。ええ、……………ええ、本気ですか？　あ、ちよつと！」

「……………どうしましたか？」

「教授が屋上で月見したいって、部屋出て行っちゃった。多分そのうちそっち行くから。あーあ、どうしよ」

「団子持って先輩も来たらどうですか？　冷蔵庫の中です」

「やっぱりそうなるか……………あんまり騒いでたらまた事務に怒られないかなあ」

「できるかぎり静かにやりましょう」

「できるのか？　このメンバーで」

それもそうか、とは思ったけれども、あえて言わなかった。ちよつとした沈黙の後にため息が聞こえて、わかった、今から行くから、と言って通話は終わった。

よししよ、と勢いをつけて、僕は起き上がる。

嫌に静かだな、と思つてたら太子は離れたところ、屋上の柵の上に乗って遊んでいやがつて一気に血の気がひいた。

「ほーら見る妹子、すごかろう！」

「ふざけるな！！」

その後、柵から太子を引きずりおろしたり松尾先生がようやく来たり、鬼男先輩も団子を持ってあらわれて食べてる途

中で結局事務の河合さんに見つかつてみんな揃つて怒られたりした。

月だけはその間も雲に隠れたり出たりを繰り返して、その暢気さが少しだけうらやましかつた。

「10月22日」

2009/10/22

あまり自慢できないことではあるが、本日、僕は立ち入り禁止の屋上への進入を成功させた。

今月二度目である。自慢できないどころか積極的に口を謹んで隠しておきたいところだ。

「ばっひょーい！ 星、すごー！！」

「だから！ 騒ぐなっつってんだよもううー！！」

少なくとも階段に声が響かないように、出来る限り素早くかつ静かにドアを閉め、まずは太子の口をふさぎにかかった。

「きゃー」

「待てこらはしゃぐな逃げるな！」

どたばたと足音が響いて舌打ちをする。

また事務の河合さんに見つかり説教されるのはごめんだっ
た。

この季節、昼は温度が上がるが朝と夜はすごく冷える。
研究室での寝泊り用におきっぱなしになっていた毛布を適
当に、屋上の真ん中に広げて敷いた。

これだけでも直接座るよりずいぶんましだろう。

「用意がいいのなお前」

「当たり前です。これで風邪とか引いたらどうするんですか。
本末転倒もいいところでしょう」

「そっちのかばんは？」

きらきらと何かを期待する目を真っ直ぐに向けられるとひ
ねくれたくなる。

ちよつと顔をしかめたのには、きつと暗いから気づかれな
い。

無言で、僕はかばんを逆さまにして中身を出した。

おお、と太子はうれしそうな声を上げるけど別にたいした
ものはない。

適当なお菓子とお酒が少しだ。

飲まず食わずではこの寒さの中、やっつけられないと思っただけだ。

「準備いいのなお前」

「あんたが考えなさすぎなんですよ」

せめてあったかい飲み物でも用意すべきなのだ。

星が見たい、なんて言い出したのは太子なのだから。

いつだってそういうイベント事を用意するのはあんたの方。いい加減、その為の準備というものを覚えてほしい。

ノープランで突き進むから、その分僕が色々やらなきゃいけないくなる。

まあ今回は、研究室の買い置きですんだから別にいいんだけど。

また明日にでも買い足しておこう。いつどれだけ必要になるかわからないから、お菓子や飲み物の備蓄は大切だ。

「さっそくさっそく。ぱっひょーい！」

「なんでもその一言で済ませようとしなくてください」

それでも付き合つて、僕も控えめにぱっひょい、とよくわからないことを呟いて缶ビールを太子とぶつけた。

炭酸が辛くて、この気温でか適度に冷えている。

アルコールのまわりが異様に早い太子は早速けたけたと笑

い出した。

「ひやははははー、妹子、膝枕ー」

「寄るな！」

ずるずると近寄って擦り寄ってくる頭を押しつけるので必死になって、不本意ながら体は温まってきたけれどもちっともありがたくもなるともない。

塩っぱいものがほしくなってポテチの袋を開ける。太子が右腕に寄りかかってきて心底うざかった。

「流れ星ー流れ星ー、ははは！」

「ちよ、あんたのまま寝るなよ。星見ると言い出したのあんたなんだからな」

「起きてる起きてる。ああー、何お願いしようかなー。どうしよう」

ぱりぱりとぼてちを噛み砕く。指先の塩分をなめて、ビールをおおる。

これだけでどうしてこんなに酔えるのか僕は不思議でならない。

時々何の脈絡もなく笑う太子に、やっぱり用意するのはコーヒーとかにするべきだったかと早々に後悔し始める。

だって冷蔵庫見たらこれしかなかったから。

コーヒーをいれたところで水筒がないから持って来れな

つたし。
そんなことを考えて。

「見て」

す、と僕から離れた太子がふらりと危なげな足取りで立ち上がり、泳ぐようにふらつきつくるりと回って上を指差した。

その先には真つ黒な空と無数の星屑。いくつかの話を思い出した。

宇宙は膨張し続けて成長の中途だと。

星が瞬くのは上空の空気の揺らぎ。

今見えている星の光は過去の残像。

すべて、目の前の人から聞いた話だった。

そういえばこの人は夜空が好きだった。

赤い顔をして酔いに潤んだような目で、うっとり笑って太子が後ろで手を組む。

「なあ、妹子。お前は何を願うの？」

「太子は、」

誤魔化し方ばかりがうまくなったな。

口を開く一瞬手前で、そんなことを思った。

「何を？」

「んー、そうだな……………」

わざとらしく太子があごに指を添える。

しかし表情に悩みや迷いは一切ない。

もうすべて決まっているのだとわかってしまった。

最初から決めていた願いを太子は口にする。

そう、僕に知らせるための仕草でしかなかった。

「次の流星の夜を、またお前と過ごせますように」

太子は笑っていた。僕は暗いことを言い訳に無表情を貫き通す。

この場面にふさわしい表情や反応が僕にはわからなかった。だから適当に相づちをうつことも冗談を言ってはぐらかすこともしないで、太子の好意を受け止める。

そして何一つ返さない。

たぶんそういうことを、この人は望んでいないと感じた。

「あ」

笑う唇が開かれて眩きが落とされる。

僕は缶ビールに口をつけて、残りの半分くらいを一気に喉に流し込んだ。

そのついでのようにくらい空を見上げて太子の指し示す先

をたどった。

「落ちる」

すい、とそれは、涙のようだ。

一際輝く星を指して、星が落ちる様を見た。
あとを追うようにもう一つ光が流れる。

「なあ、お前は何を願ったの？」

目を閉じて僕は答えない。

アルコールが効いてきたのか、体はほんのり熱を持つ。

僕は。

僕の願いは。

またビールに口をつけて缶を空にした。

握りつぶして適当に放り、僕は仰向けに寝転がる。

「すごい………空、ですね」

「うん」

転々と散らばる星屑は互いに距離をとって、それぞれの強
さで光を放つ。

燦然と清らに見える光は空が澄んでいる証拠だろうか。

凍てつくような空気の中、それでもまだ、吐き出す呼吸は

白くはならない。

これからもっと寒くなる。

そう、予感させる夜だった。

「きれい？」

くすくすと笑う太子が真横に寝転がる。

こつん、と手と手がぶつかってそのまま握りこまれた。

「お前、手、冷たいな！」

ふざけたように大げさな声が、あつためてやるから感謝し
ると続けて両手のひらに包まれる。

間に合ってます。そんなことをぼやきながらも僕は太子を
振り払わない。したいようにさせている。

すい、と空をまた光が横切る。

叶うといいのにな、という声にまた、返事をしなかった。

じつくりと暗い空を睨みつけ、願回事三回、そんな迷信に
すがりたいと、僕も僕なりに必死な気持ちで手をつないでい
た。

「10月31日」

2009/10/31

やたらと注目されてる、ということには朝自分の机に着いた時からすでに気が付いていた。

太子の机は僕の目の前だ。ちらちらと、論文をまとめながら落ち着きなくこつちを見てきていることには気付いていた。ただし注目される理由に心当たりなんかないので無視してただけの話だ。

この面倒くさい先輩は、もはや僕の方から少しでも関心を示しただけでヤブヘビになる気がする。なんて厄介なヤツ。そんな調子で一時間と経ち、松尾先生が講義に出かけたり鬼男先輩が何も言わずにいなくなったり、僕は僕で迫りくる卒論の締め切りに向けて資料をそろえて並べたり、ということをするうちに昼休みになった。

チャイムの音に初めて時間を意識して、うん、と思い切り背伸びをして腕を伸ばした。

昼ごはんでも食べるか、とそこで正面を見たらやはり太子

と目が合った。

じ、っと見つめてもそらさないで、二人きりの部屋の中、妙な沈黙を生産しつつ睨み合う。

………ことには、すぐに僕の方から飽きてしまつて、怪しく思いつつも手元の資料をまとめるために、クリップを探そうと一番上の引き出しを開けた時だった。

もさ、と。

一気に引き出しの中から何かが膨れ上がりあふれ出した。

ぎよつとして、思わずイスを蹴倒して飛びのく。

瞬きを繰り返して机を見つめて呆然とした。

何が起こったのか把握できない僕の耳に、ぴろりろりん、なんていう馬鹿みたいに場違いで気の抜けた電子音が聞こえてきた。

ぎぎぎ、と音でもしそうなくらいのぎこちなさで音の発生源を見る。

部屋には二人しかない。

僕と、太子と。

犯人なんかわかりきっていたはずなのにいったんストップした思考はなかなか回復しないのが僕の弱点だ。

これ以上ないってくらいに楽しそうでかつ意地の悪い、にやにやとした笑いを貼り付けた太子が、僕に向けてケータイのカメラを構えていた。

ほれ、と画面を見せてくる。

そこに映っていたのは間抜け面の僕だ。

「トリック、アンドトリート！」

改めて引き出しと、そこからあふれ出して床に散らばったものを見る。

どうして引き出しの中に今まで納まっていたのか不思議なくらいの量の飴やチョコレート、キャラメルにマシユマロなど種類の大量のお菓子が突然出現していた。

小分けされたいろんな柄の、全体的に明るく派手なパッケ―ジの山が出来上がっていた。

「……………なんですか、これ」

僕の声じゃないみたいにくわばった声だった。

「何、妹子知らないの？ 今日って何の日？」

知らない。いや、知っている。

気の抜けて朗らかな声にびっくりしたのが馬鹿みたいで思わず頭を抱えてしやがみこんでしまった。

弾けるような笑い声がふつてくる。

「なに、なに、そんなにびっくりした？ どうだすごいだろ！！ 昨日一生懸命仕込んだんだからな！」

「……………だから昨日遅くまで残ったのか」

「妹子なかなか帰ってくれないから泣きそうだったし」

「帰れよ！ こんなことしてないで！」

「今日も今日でほんと、妹子最後まで気付かないで帰るかと思っただうしようかと思つたよ」

「気付かないで帰りがつたよ！！」

うずくまったまま怒鳴る。

そうしたら太子の努力は水の泡、僕は何事もなく一日を終えられたのかと思うと驚きすぎてどっかにはぶつ飛んでいた苛立ちがふつつと沸いてくる。

「お前は！」

「はっぴーはるーういんー」

勢い込んで立ち上がった僕の目の前に、机越しに太子が手のひらを広げてくる。

「お菓子くれなきや、いたずらするぞー」

「もうされたよ！！」

「違う違う、さっきのはトリックアンドトリート。欲張りな私もこのためにどっちも用意してやった私を褒めろ！」

「ほざけ！！」

「きやん！！」

ばこんと頭を殴ってやった。

グーで。

殴られた場所をさすって涙目で太子が何かを訴えてくるのを僕は無視した。

とりあえず資料をまとめて昼食だ。

と、思ったけれど肝心のクリップはお菓子里もれて探せない。

引き出しのそこが見えないくらいにみっちりとお菓子はつまっていた。

ため息をついて、研究室の棚を適当にあさって運良くコンビニのふくろを見つけたため、床に落ちた分を含んでお菓子を集めることにした。

それにしても多い。

こいつだって論文の締め切りが近いはずなのに、この時期にいったい何をしているんだ？

ちら、と太子のほうを見たら、相変わらずの涙目で唇を尖らせてすねていた。

「だって、最近お前忙しそうだし。甘いものあった方がいいと思っただよ」

いったいなあ、と太子がぼやく。

僕は途端に怒っていることが面倒くさくなってしまう、また、ため息をついた。

こういうのを毒気を抜かれたというんだ。きつと。

なんだか怒る気が失せてしまい、言おうか言うまいか、朝からずっと悩んでいたことを口にした。

ただし手は忙しくお菓子を拾い集め、太子の顔は見ようとはしないで。

「冷蔵庫の、一番上の段の右」

「……………え？」

「あんたでしよう？ おととい、僕の机の上に雑誌広げておいたのは」

気付け、と思った。

これだけ言っただけでも僕としては大サーブスなんだからちらりと、気付かれないように太子を見る。

一瞬考え込むように難しい顔をしたあと、ばあ、と。それはそれは、うれしそうに表情を変えた。

「ありがとう！！」

太子が駆け出して隣の部屋に向かう。隣が教授室で、冷蔵庫はそっちにある。

ただし研究室の生徒なら誰でも使っていることになっていて、教授室への出入りはたとえ先生がいなくとも自由だ。

ばたばたとやかましい足音の後、うれしそうな歓声が聞こえてきて、ふとゆるみそうになる頬を引き締めるのが大変だった。

おととい、僕の机の上に一冊の料理雑誌が放置されていた。特集はかぼちやのお祭りの記事で、ご丁寧にある箇所について箋まで貼ってあった。

そこにのつていたのはかぼちやプリンで、どうせ、犯人だつて訴えたいことだつてわかりきつていた。

「素直にお願いすればいいんだよ、ばーか」

呟いてみても聞く人はいない。

それでも作ってきてしまう僕も僕だ。

甘やかしてるよなあとは自覚しながらも、まあいいか、と適当に流して、コンビニ袋いっぱいにつまったお菓子の山に少しだけげんなりして、プリンの感想を聞くために僕も教室へ向かった。

「11月11日」

2009/11/11

どうせこんなことだろうとは思った。

朝、大学に来る前に太子がコンビニに寄りたいと言い、弁当やお茶などといっしょに見知った赤いパッケージの菓子を買っているのを見たときから。

「いーもこ。妹子ー！」

「ああもう少し黙っててくださいいどこまで読んだかわかんなくなるでしよ」

「和訳？ そんなの後で先輩が手伝ってやるからさー。なー」

「ああもううつつとうしいな！」

先輩面するならせめて静かにして欲しい。

そんなことを訴えようと意気込んで太子を見ると、思ったより近く、僕のすぐ後ろに立っていたので思わず左手が飛び

出した。

気付いた時には腕が真っ直ぐにのびていたとか、まあいたいそんな感じだ。

「プリッツ！！」

「いやそれ違いますよね！？」

殴られた衝撃でか太子がくわえていたポッキーがくるくる回ってきれいにすつ飛んでいくのをなんとなく目で追ってしまった。

「ああもうもつたいない」

「ちよ、拾うな、食うな！」

「なんだ妹子三秒ルール知らないのか？」

「どこの小学生の理屈だよ！？」

「まあまあ」

妹子は怒りんぼうだなー。糖分が足りてないんじゃないか、とか。

次の展開が読めてしまい、僕の口元が変な形に「ひん曲がるのを自覚する。

「だから、ほれほれ。ポツキゲー」

「しませんからね」

強く言い切り、太子が持っている箱からチョコレート菓子
をありがたく一本いただいでさくさくと前歯でかじる。

おいしかったのもう二、三本もらつて、机に向きなおり
記憶に自信のない単語にペンで印をつけた。

ざくざくと噛み砕いていると背中をぼかぼかと殴られる。

「なんだよ！ この私が誘ってるんだぞ！ のってこいよこ
の朴念仁ー！」

「朴念仁て……………」

呆れながら、背中をぼかぼか殴らせながらざつと段落の終
りまでを一気に読んだ。

太子の手がぐいぐいと押し付けるような叩き方に変わて、
すねているような気配が伝わってきた短く息を吐く。

このまま放つておいたらいじけるんだらうな思って思った。

「それは先輩が、つていう意味ですか？」

「え？」

音を立てて乱暴に、ペンを机の上に転がす。

イスを回して振り返ると、握った拳を中途半端な高さに振
り上げた太子がきよんとんとしていた。

「先輩が誘っているんだから、無視するな、つてことです
か？」

じつとその奥まで見透かすように見つめる。

じわり、とわずかに太子が顔を赤くして、両手で菓子の箱
を握りしめてうつむいた。

「いや、なんていうかさ、どつちかっていうかその、」

恋人として、と。

先ほどまでのやかましさとほうつて変わつて、聞き取れる
ざりざりの大きさを囁くみたいに太子が言った。

ついつい笑いそうになる口元を隠すことは実はかなり簡単
だ。

僕は腕を伸ばして、太子の襟元を掴む。

驚いて大きく開かれる目を見すえたまま、ぐいと引き寄せ
て屈ませて。

ぶつかりそうな勢いで近づいてきた唇に口付けた。

近すぎてぼやける目が、それでも驚いているのがわかる。

こういうときは本当は目はつむつた方がいいんだらうなと
思ったけど、まあ、そんなことはどうでもいい。

むしろ驚きに見開かれる目が何よりも正直で良かった。

そのまま重ねるだけのキスをして、でもそれだけじゃつま
らなかつたので最後に少しだけ舌を差し入れて唇の内側の浅
いところを舐めてから襟元から手を離した。

ぐ、と太子が身を離して口を真横に引き結んで、持っていた菓子箱を取り落としそうになるものだからその前に支えてやる。

太子があからさまにそつぽを向いたので思わずため息をついてしまった。

何を恥ずかしがっているのだろう。

この人、僕よりも年上だよなとほんの少し呆れてしまった。

「したいなら、素直にそういえばいいじゃないですか」

「お前……………ポツキーゲームがダメでキスがいいとか、ラ

インがよくわからないんだけど！」

「いやですよそんな恥ずかしいこと」

「……………いやもうよくわからないんだけど」

「こっちの台詞だよそれ。それに僕、まどろっこしいことは嫌いなんで」

今度は無理に引き寄せるなんて乱暴なことは、しない。

そつと太子の腕に手を伸ばして触れた。

「どうしてほしいですか？」

なんだか難しい顔をして、口元を不機嫌そうに引き結んだ太子が、一瞬背後のドアを気にした後に行った。

怒ったような声だった。

「キスがしたい」

ゆるく腕を引けば今度は太子の方から屈んでくれる。

唇で触れ合って、何度か角度を変えてキスをする。

合間にそつと、今誰か来たらどうするんだよ、なんて太子が言ってくるから喉の奥だけで笑った。

そしたら容赦なく突き飛ばすんで、と答えたら強めに頭をはたかれた。

少し痛かったので仕返しとばかりに、触れ合うだけのキスをもつと深いものに変える。

とつさに身を退こうとするのを腕を掴んで引き止めて、引き寄せた。

そのままずっと、息苦しさに太子が暴れだすまで続けた。

チョコレート菓子なんかくたつてひどく甘い、そんなキスを。

「11月13日」

2009/11/13

何をやっているんだ僕は。
ひとりですごい勝手にげんなりして今度こそ部屋に入った。

「きゃー！！」

太子が。

部屋の真ん中、そういえば確か先週末にも僕の家に来た太子が、とうかこないだ初めて僕の家に来たわけなのだが、勝手に押入れから見つけて僕に用意させたコタツがあつて、そこから頭を突っ込んで尻を出した状態で生えていた。ついつい生温い目で見守ってしまう。

そのまましばらくコタツ布団の裾を握りしめてまったく隠れられていない体勢で震えていた。

辛抱強く待つていれば五分くらいしてようやく、そろりと太子が顔を出して僕を見た。

「……………なんだ、妹子か」

あからさまにほっとした顔でへらりと笑うけれどもまだ頬が引きつっている。

太子はもそもそコタツに足を突っ込んで、またふーっと安心してように息を吐いた。

「太子太子」

「なんだよおいも……………っ！！！！」

ふとトイレから帰る途中、窓に目をやったけれどもひっきりなしに叩きつける雨粒で外はまったく見えなかった。

おまけに風のものすごい音がする。そのたびに勢いを増した雨粒がひどい音をたてる。

今晩は冷えるだろうなと思つて部屋に入る時、ドアを開けるのをいったんためらう。

思い付きで、激しくドアを叩いてみた。

「だだだだだ誰もいません！！」

どすんばたんと、何をしてるんだかまったくわからない音がする。

そこに何か物が壊れる音が混じっていないことに安心しつつ、心配するならこんな馬鹿なことは止めろよと僕は自分で自分に突っ込みを入れて、ほんの少し落ち込んだ。

悲鳴は言葉にならなかつたみたいだ。

僕は気まぐれに量販店で買ってきたお面をつけて首を傾げてみせる。

「どうしましたか？」

「なんでもない！！」

そんなことを言うくせに、素早くコタツから飛び出して太子の後ろの、壁際にあつたベッドに飛び乗って布団をすっぽりと頭からかぶって隠れてしまった。

今度はきちんと全身が隠れている。

しかし僕のベッドだぞ。せつかくきちんと布団敷いておいたのに、台無しじゃないか。

僕はお面を外して声をかける。

「怖いんですか？」

「怖くないよ！ ぜんぜん！ あっはっは、なに、妹子の方向が怖いんじゃないのー？ やーい、弱虫ー」

しかし布団にすっぽりと包まり丸まったまま言われても、悔しくないどころかいつもみたいに苛立ちもしない。

僕が手元のお面を見つめる。

どうしてこれが怖いのかさっぱりわからなかった。

口元にたくさん開けられている穴は呼吸がしやすそうで親

切だし、じっと見つめていれば、なかなか愛嬌のある顔立ちにも見えてくる。

「ねえねえ太子。怖いんですかー？」

「こここ怖くないって言ってるだろー！？」

僕はベッドのそばまで膝立ちで這って行って、つんつんと布団の塊をつついてみる。

何だかここまであからさまな反応をされると逆にかわいく見えてくるから困る。

にやにやと笑いが止まらないのはきつと見られていないからだ。

自分の思いつきにひとしきりにんまりと笑ってすぐさま実行に移す。

「っ、いやあああああ！！」

無理に引つ張って作った布団の隙間から仮面を差し入れてみただけだった。

両手をあげてかぶっていた布団をぶつ飛ばし、そのままきつと近くにあつたからという理由だけで僕の体に抱きついてくる。

細かく震えているのがわかりやすく伝わってきて何だかひどくおだやかな気持ちになれた。

「怖いんでしょう？」

「ぼーかばーか！ 怖くなんてないやいー」

そのまましゃくりあげる音にやりすぎたかなあとか思いつつも、反省する気はこれっぽっちもないのだから僕も大概だよなと一応呆れてみた。

「はいはい、怖くない怖くない、いい子いい子」

力加減なく抱きつかれるのは思った以上に気分が良かった。刈り上げた後ろ頭をなでて、少し僕よりも高いような体温を心地良く感じた。